

保健授業における反転授業の導入に向けた基礎的研究

吉本 篤史 (宇都宮大学大学院)

1. 目的

本研究の目的は、初等中等教育における反転授業の授業実践研究に関する文献調査と、保健授業の担当教師を対象とした質問紙調査を実施することによって、今後の保健授業における反転授業の導入に向けた知見を得ることである。

2. 研究方法

1) 初等中等教育における反転授業の授業実践研究に関する文献調査

データベース CiNii および J-STAGE による文献収集を行い、19 文献を分析対象とした。収集された文献について、「反転授業導入のねらい」「事前課題の形態」「授業内の学習活動」等の 13 の観点で整理した上で考察した。

2) 保健授業の担当教師を対象とした反転授業に関する質問紙調査

2017 年 10~11 月に、T 県内の保健授業の担当教師 341 人を対象とした無記名自記式の質問紙調査を実施した。主な調査項目は、反転授業の「認知状況」「実施状況」「実施の効果」「実施上の課題」「導入意欲」等であった。

3. 結果および考察

1) 反転授業の授業実践研究に関する文献調査

各教科の特性に応じて、思考力等の育成を目指した「高次能力育成型」の反転授業の実践が多くみられた。例えば、算数科での実践では、反転授業により算数的思考力の向上等の効果が報告されていた。保健においても、教科としての保健の「見方・考え方」を踏まえた、思考力・判断力・表現力等の育成に関わる実践が望まれよう。

事前課題としては、19 事例中 17 事例がタブレット端末等を用いた映像教材による事前課題を設定していた。保健授業の実践を取り巻く環境として、現段階では情報通信機器等の整備状況や活用状況は十分とは言えないため、それらの改善と併せて推進を図ることが求められる。

授業内の学習活動として、事前課題で学習した知識をもとに、ペアやグループでのディスカッション

に取り組み、課題解決的な学習を行っている事例が多くみられた。例えば、理科の実践では、授業内でジグソー法を導入し、事前課題で学習したことを各エキスパートグループで発表し合ってまとめるなどの活動が見られた。保健授業でも近年、ブレインストーミング、ケーススタディ等の指導方法の工夫が見られる中で、反転授業の導入によって、それらの指導方法による学習効果の質の向上も期待できると考えられた。

2) 反転授業に関する質問紙調査

反転授業について、その認知率は 35%にとどまっていた。多くの保健授業担当教師が反転授業の考え方を知る機会の設定が望まれる。

保健授業で反転授業（事前課題の設定）を実施した経験がある教員は 6%と少ないながらも見られた。実践された内容は、小学校の「体の発育」、中学校の「事故の防止」、高等学校の「思春期と健康」等の内容であり、そこでの事前課題は「出生時の身長・体重を母子健康手帳で調べ、ワークシートにまとめる」や「学習内容に関する資料を事前配布し、ディベートに向けた準備をさせる」等であった。

反転授業（事前課題の設定）を実施した教師が実感した効果として「学習意欲の向上」「主体的な学びの促進」が高かったが、「深い学びの促進」は低かった。実感した課題としては「児童生徒の事前課題の実施状況」「事前課題準備の負担」が目立った。

反転授業の導入意欲を教職経験年数によって比較した結果、ベテラン群（20 年以上）が、若手群（10 年未満）、中堅群（10~20 年）に比して、有意に低率であった。保健授業における効果的な導入を図る上で、導入に意欲的な若手・中堅の教師による実践にとどまらず、保健授業の指導の豊富な経験を有するベテラン教師との協働の推進が課題のひとつであることが示された。

4. 結論

本研究の結果、教科としての保健の特性を踏まえつつ、児童生徒の主体的・対話的で深い学びを促すような保健での反転授業の導入の在り方についての議論と実践の蓄積が求められることが示唆された。